

ダッグスとディー



ジェイクおじいちゃんは口笛をふきながら、トリスタンをむかえに学校まで行くところでした。校門に近付くと、2人の子どもたちが大声で言い争っているのが聞こえてきました。声は、校庭の方からしてきます。

（おやまあ。どうやらトリスタンのようだ。一体どうしたのか、見に行かないと。）とおじいちゃん。

急いで校庭に行ってみると、トリスタンとデリックが校庭の遊具の上で言い合いをしていました。

「一体、どうしたんだい？」とおじいちゃんがよびかけました。2人は言い争うのに夢中で、おじいちゃんの声が聞こえません。いつまでも言い合いを続けています。

「2人とも！・・・」おじいちゃんが言い終わる前に、デリックがトリスタンをおしました。トリスタンは遊具のタワーとつながっている橋のふちに立っていましたが、よろめいてしまいました。

「手すりにつかまるんだ！」そう言いながら、ジェイクおじいちゃんがかけつけて、トリスタンが落ちないようにささえました。



「ああっ！^お落ちなくてよかった。」^{デリック}は
^{しんぱい}心配そうに言いました。

トリストンは、だまってタワーから^お下りて^き来ました。

ジェイクおじいちゃんは、2人を^{ふたり}校庭の^{こうてい}外れに^{はず}
あるベンチに^{すわ}らせ、^{たず}ねました。「一体、^{いったい}
どうしたんだ？^{はな}話してくれるかい？」

すると、デリックが「ごめん^いなさい。」と^いって、
^な泣き始めました。トリストンも^な泣き始めました。

「2人とも、^{わる}悪かったと^{おも}っているんだね。だけど、
^わ分かるかな。言^いい争^あっても^{もん}問題が^{かた}片付くわけじゃ
ない。トリストンは、もう少しで^{すこ}橋から^{はし}落ちる
ところだったんだ。もし^お落ちたら、^{おお}大ケガをしてた
だろうよ。」と、ジェイクおじいちゃん。

「おじいちゃん、^{たす}助けてくれて、ありがとう。」と、
トリストン。

「間^まに^あ合^あって、よかったよ。さあてと。お前^{まえ}たちが
この^{きょう}教訓^{くん}を^{おぼ}覚えている^{たす}助けになる^{たす}ことがあるかも
しれない。」

「お話を^{はなし}してくれるの？」^{デリック}が^き期待^{たい}して
たずねました。

「そうだよ。^{きょう}今日、^{まえ}お前^{まえ}たちに^お起こったのと、
^{はなし}に^{はなし}たようなお話だ。」





油圧ショベルカーとダンプカーがガタゴトと、
でこぼこの工事現場に向かっていました。公園を
造るために、地面を平らにならす仕事を
与えられたのです。

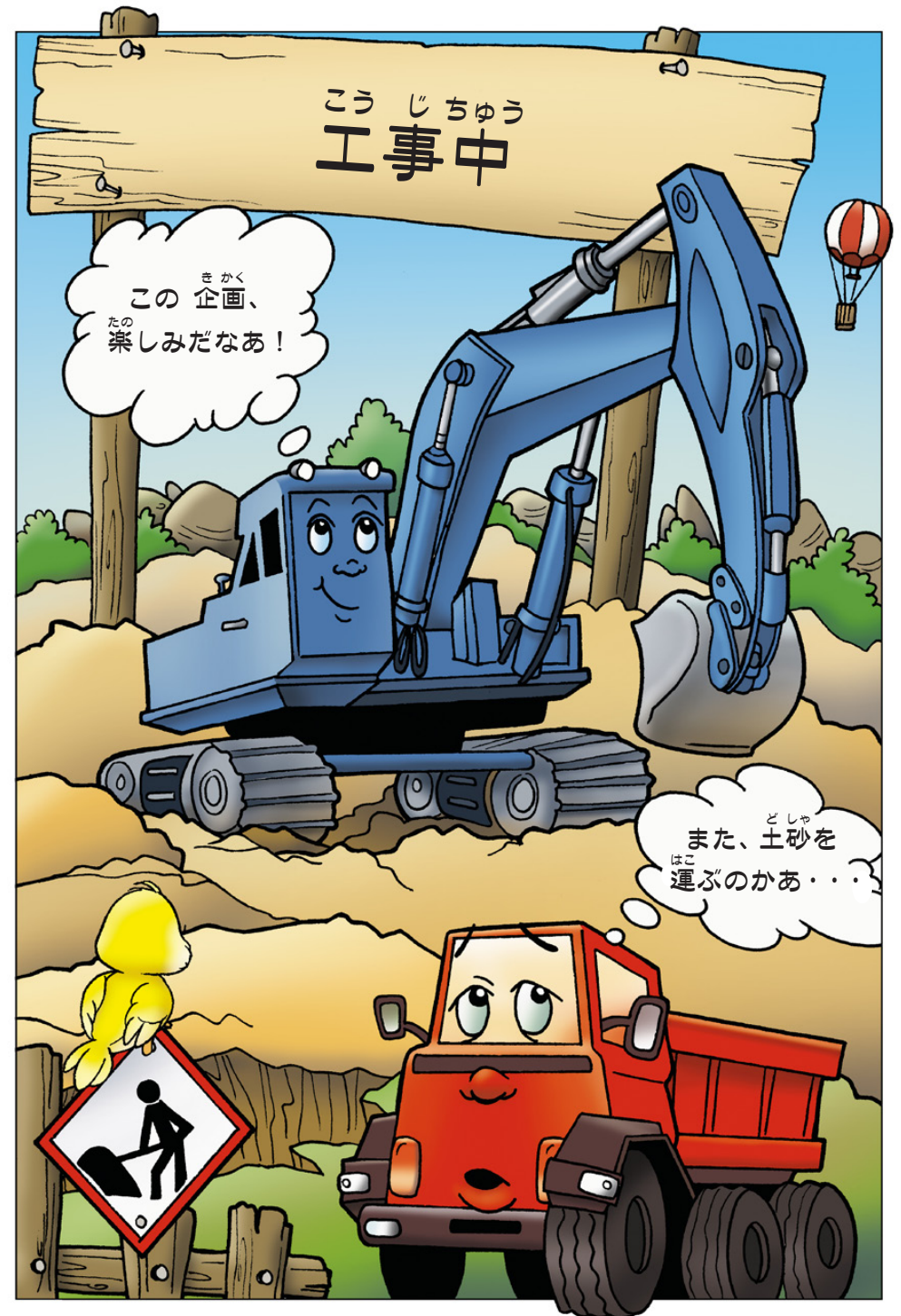
ダンプカーのディーは土砂の山に向かいながら、
ため息をつきました。日のじりじり照り付ける暑い
中で、1日中、土砂を運びながら行ったり来たりする
仕事は楽しいものではありません。その一方、
油圧ショベルカーのダグスは、この仕事を楽しんで
いました。出来上がったらどんなにすてきな公園に
なるだろうと、今からもう、思いをめぐらして
いるのです！

「さあ、始めようか。左側のはしから始めて、
右側に向かって進めたらいいね。」ダグスは
陽気に言いました。

「はいはい。」ディーはぶつぶつ言いながら、
ダグスが土砂をのせられる位置までバックしました。

「じゃあ、行くよ。」ダグスはそう言うと、
バケットいっぱいにすくい上げた土砂を、ディーの
荷台に下ろしました。

ディーは思わず、うめき声をあげました。「今は
もうそれで十分だ。土砂を下ろしてくるよ。」





「だけど、荷台にはまだ半分しかのってないよ。」
と、ダグスが言いました。

「それでも、ぼくにはもういっぱいなんだ。」
そう言うと、ディーはガタガタと音を立てながら、
まもなく公園になる工事現場の外れに土砂を
下ろしに行きました。ところが、荷台のラッチが
きちんと閉まっていなかったために、でこぼこした
地面でゆれるたびに、荷台から土砂がこぼれ、
通った後に点々と土砂の小山ができてしまいました。

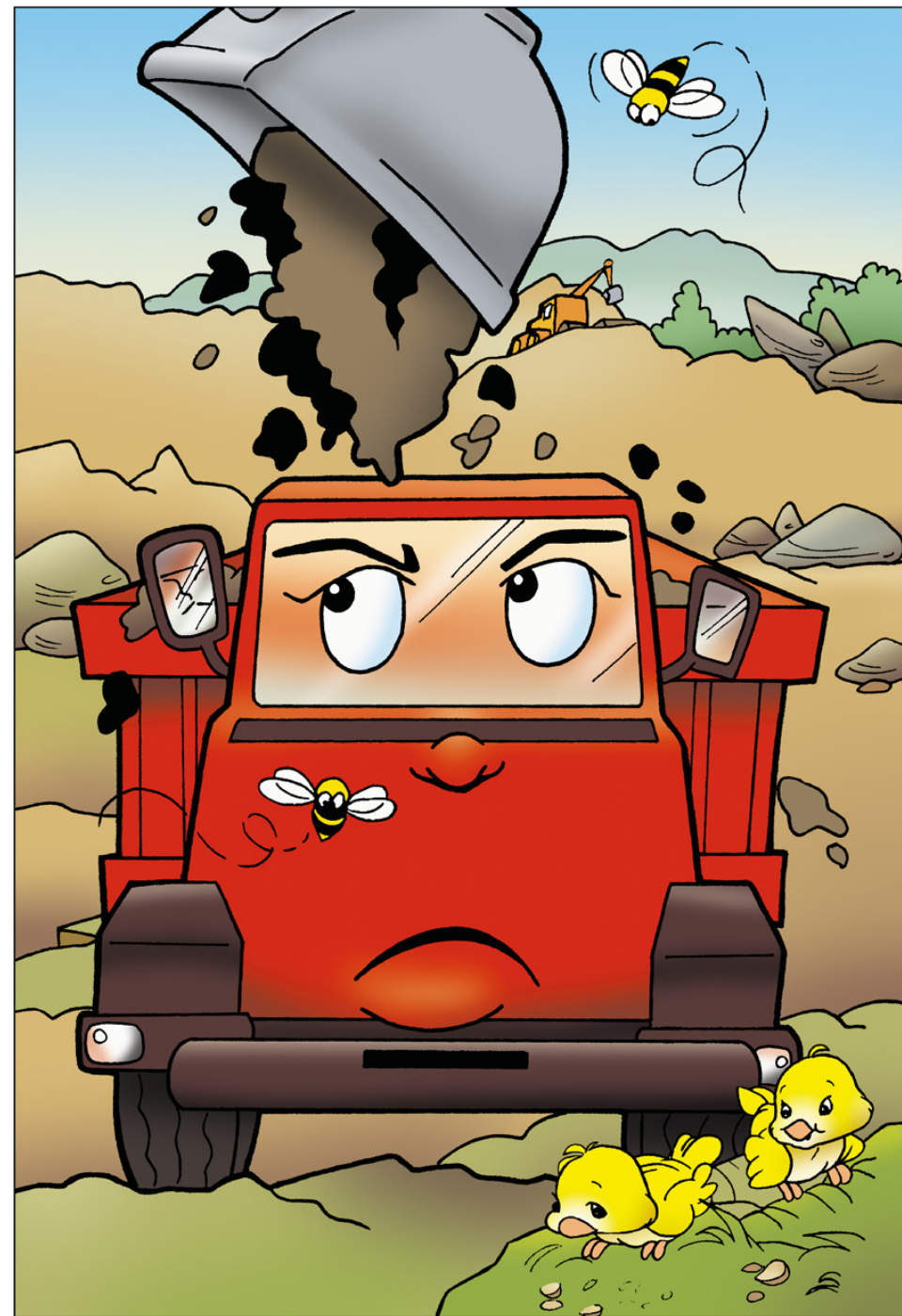
ディーがもどって来た時、ダグスはむくれて
いました。「ディー、君はぼくに2倍の仕事を
させる気かい。君が落としていった土砂を、
またすくい上げなくちゃいけないじゃないか！」

「ぼくの荷台にちゃんと下ろさなかったんじゃないのかい。ってことは、君のせいかもよ。」

「そりゃないぜ！」ダグスは腹が立って
きました。

「なあ、ダグス。ぼくは今までずっと、何でも
君の言う通りにしてきたんだ。もううんざりだよ。
他のやり方だってあると思うんだがね。」

「そうなのかい？ じゃあ、なんで言わなかったん
だい？」ダグスがたずねました。



「う～ん・・・。言う ^{い きぶん} 気分じゃ なかったのさ。」 ディーは ^{ことば} 言葉につまりました。

「とにかく、ぼくは ^{こうえんづく まえ} 公園造りは 前にも やった ことがあるから、やり方は ^{かた わ} 分かってるんだよ。」と、ダグ스가 どなりました。

「そんな こと ないさ。ただ、君の ^{きみ} ほうが ぼくより すぐれて いるって、^{おも} 思ってるだけだろ。」

「でも、^{ほんとう} 本当に そうなのかもよ。」

「じょうだんじゃ ない！」 ディーは ^い ふきげんそうに 言いました。

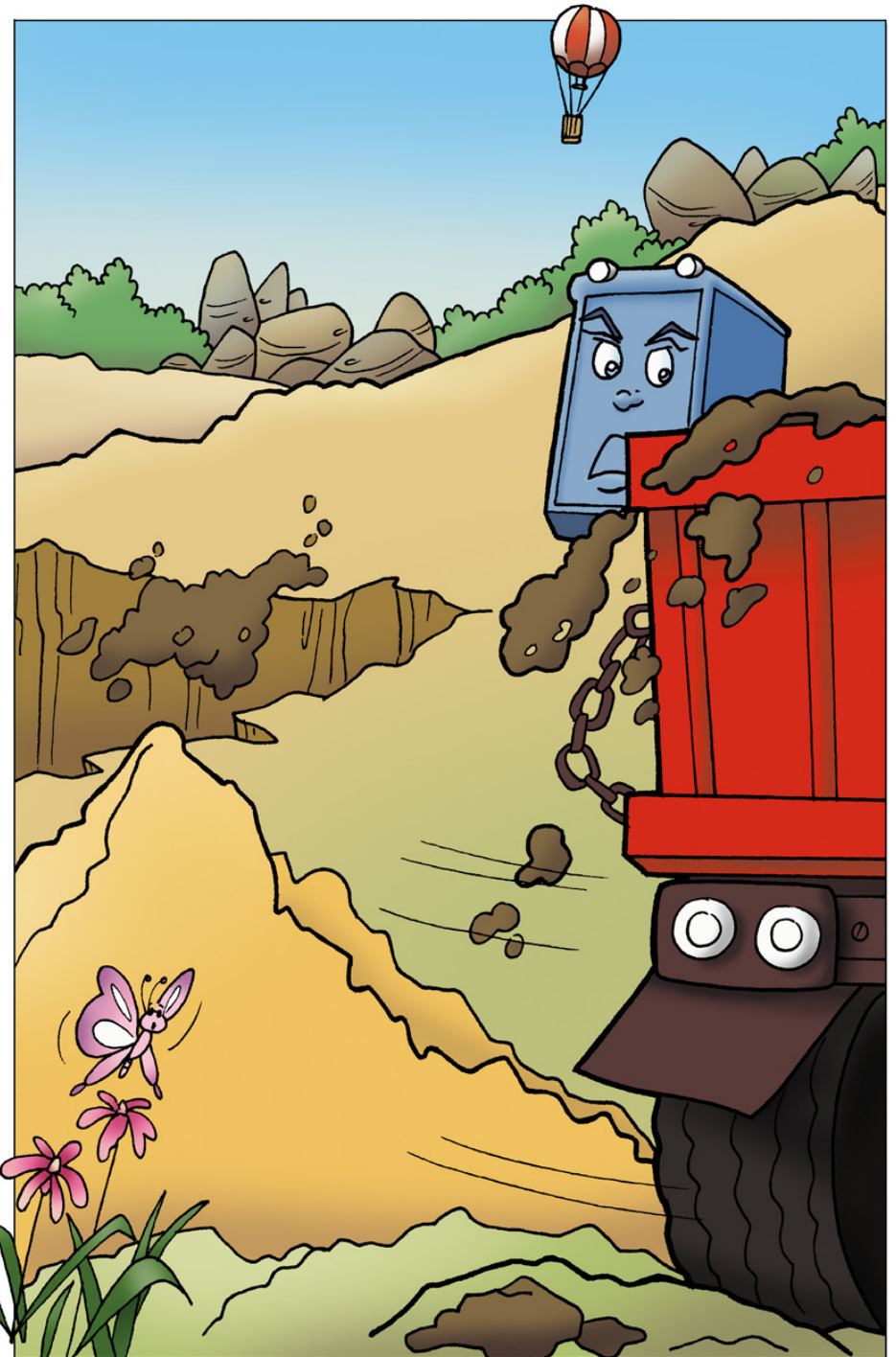
こんな ^{い あらそ} 言い争いを しながら、ダグスは ディーの ^{に だい} 荷台に ^{どしゃ はこ} 土砂を 運んでいました。ところが、ダグ스가 ^{も あ} アームを 持ち上げ、^{はい} バケツいっぱいに入っ た ^{どしゃ} 土砂を ディーの ^{に だい} 荷台に 下ろした ^{はらだ} しゅんかん、ディーは ^{ごえ あ} 腹立ちまぎれに うなり声 を 上げて、^{たいりょう どしゃ じめん お} にげてしまいました。おかげで、大量の 土砂が 地面に 落ちて しまいました。

ディーは ^{おおわら} 大笑い です。

「何て ^{なん} ことを するんだよ。」と、ダグス。

「そこに ^{どしゃ お} 土砂を 下ろした ほうが いいんじゃないか ^{おも} と思った のさ。ぼくの ^{に だい} 荷台に のせるよりはね。それにな、^{いま} 今 ^い ぼくの ^{に だい} 荷台に のってる ^{どしゃ} 土砂は、^お こっちに 下ろした ほうが いい ^{おも} と思う。」

そう ^い 言う と ディーは、^{いま} たった今、ダグスが ^{どしゃ} 土砂を ^あ きれいに ^い すくい上げたばかりの ^{ばしょ} 場所まで ^{に だい} バックして、荷台を ^い かたむけました。すると、^{に だい} 荷台に のっていた ^{どしゃ ぜんぶ} 土砂が 全部、^{じめん お} 地面に 落ちて しまいました。





「いい加減かげんにしてくれよ！ 君きみにはもう、うんざりだ！」
ダグスはアームをおろし、土砂どしゃを落おとして笑わらっている
ディーに向むかってさげびました。

ダグスはディーに突進とっしんし、落ちた土砂おをすくい上げて
ディーの荷台にだいにもどそうとしましたが、ディーは荷台にだいを
かたむけたままなので、何もなにできません。ダグスは非常ひじょうに
腹はらを立て、少しバックしてから、またもやディーに
突進とっしんしました。ただ、今度こんどはバケットをディーの荷台にだいの
下したに入れて、荷台ごと持ち上げ始めました。

車体しゃたいが前まえのめりになったので、ディーは大あわてです。

「やめてくれ！ やめてくれたら！ ひっくり返かえるじゃ
ないか。」と、ディーはさげびました。

「そこの2台だい、いい加減かげんにするんだ。」監督かんとくさんが
さげびました。「ダグス、ディーをおろしなさい！」

「君たちには、ここから土砂どしゃをどけて、地面じめんを平たいらに
するよと言いわなかったか？」と、監督かんとくさん。

「はい。」2台だいは、蚊かの鳴なくような声こえで返事へんじしました。

「じゃあ、一体いったい どうしてその仕事しごとをしていないんだ？」

「仕事のやり方しごとで意見かたが合いわなかったんです。」と、
ディー。





「君たちが協力してこの仕事に当たらないなら、仕事は
はかどらないし、つまりは、もっと長いこと働かなくては
ならなくなるってことだ。それでいいのかね？」

「いいえ。」 ディーとダッグスが答えました。

「君たちは、どうやってこの仕事を終わらせるか、
ちゃんと話し合いなさい。分かったね？」

「はい。」

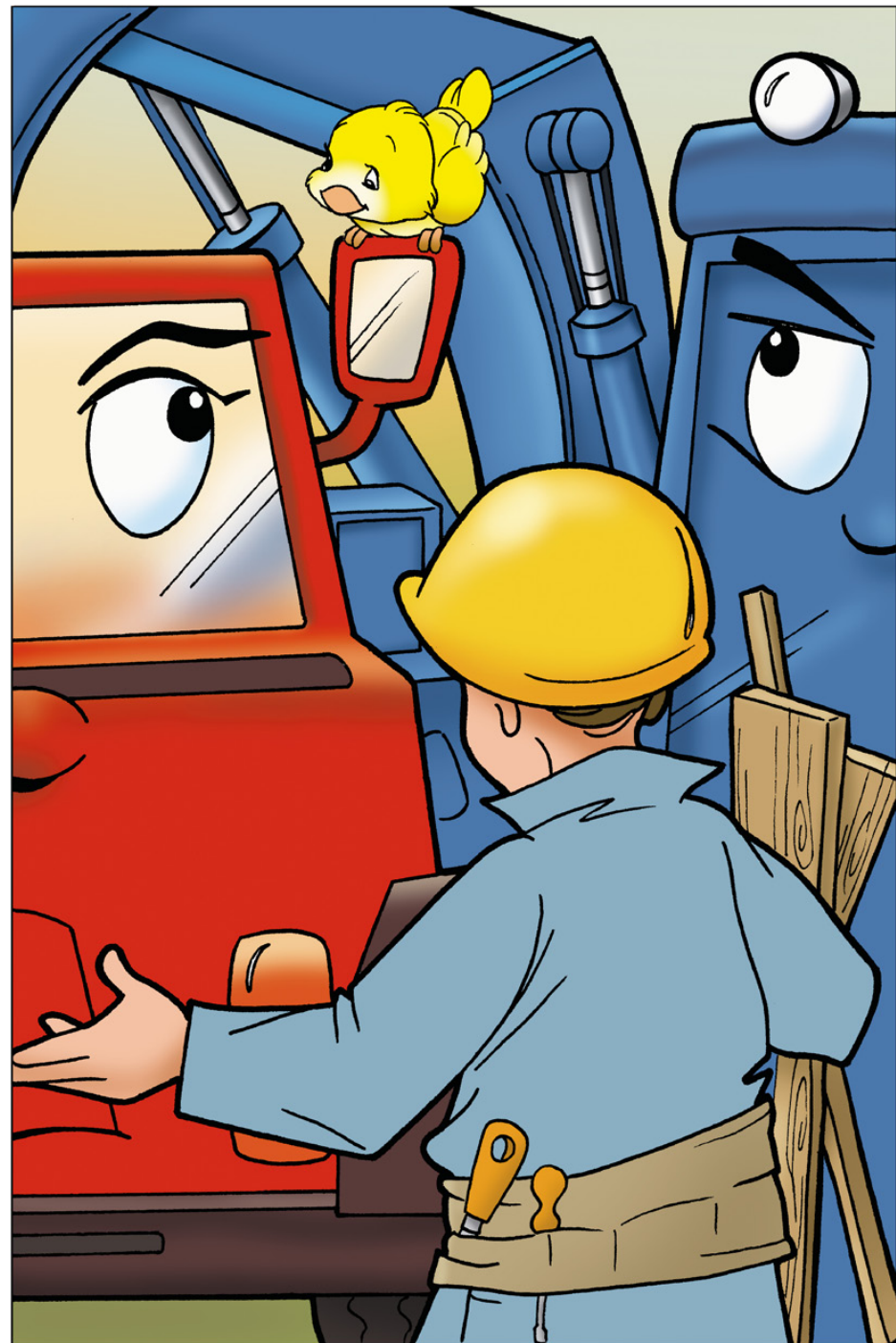
ダッグスとディーはちょっと話し合って、いったん
やり方をいっしょに決めると、2台は満足そうに
働き始め、協力して仕事を終えたのでした。

太陽がしずみかけると、監督さんが様子をみにやって
来ました。「これはこれは、感心したなあ！ 思ったより、
早く終わったじゃないか。それに、こんなに最高の仕事を
見るのは、久しぶりだ。君たちが問題をうまく解決して
くれて、うれしいよ。」

「ぼくたちもです。」と、ダッグス。

「明日の朝もまた、よろしく頼むよ。まだやらなくては
いけない仕事があるからね。協力してちゃんと仕事を
こなせる良いチームがいてくれると、助かるよ。」と、
監督さん。

「お安いごようです。」 ディーとダッグスが言いました。





「いいお話だね、おじいちゃん。デリックとぼくも、
けんかなんかしないで、ちゃんと問題を解決すべきだったね。」
と、トリスタンが言いました。

「そうだね。けんかしたり言い争っても、何も解決しない。だけど、
ちゃんと話し合えば、問題を解決するのはそんなにむずかしい
ことじゃないって、分かるだろうよ。」と、ジェイクおじいちゃん。

そこへ、デリックのお母さんが来ました。「あら、そこに
いたのね、デリック。さがしてたのよ。」

「ジェイクおじいちゃんが話をしてくれてたの。」と、
デリック。

「まあ、よかったわね。ありがとう、ジェイクおじいちゃん。
デリック、帰り道でその話を聞かせてね。」と、デリックの
お母さんが言いました。

「うん。じゃあね、トリスタンとジェイクおじいちゃん。」
そう言って、デリックは手をふりました。「また明日、学校でね。」

「明日は、デリックの遊びたいことをして遊ぶよ。」
トリスタンはデリックにそう言って、別れました。

デリックが行ってしまうと、おじいちゃんが言いました。
「やさしいんだね、トリスタン。じゃあ、帰ろうか。」

「うん。」

きょうくん いけん あ
教訓：意見が合わないときは、愛をもって、
もんだい かいけつ
問題を解決しよう。ちゃんと話し合うなら、意見の
くいちがいをなくし、問題を解決することができるよ。

